

**聖書 ヨハネによる福音書12章44～50節**

12:44 イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。12:45 わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。12:46 わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た。12:47 わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。12:48 わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。12:49 なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。12:50 父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」

**《説教》『わたしの言葉は、神の言葉である』**

◆只今朗読されました聖書の御言葉を通して、私たちの主イエス様の御言葉を共に聞きたく思います。44節に「イエスは叫んでこう言われた」とあります。この叫びは、以下に語られる内容のこの上ない強調を表すものであります。誰も聞き洩らさないようにという主イエス様の強い意志を表しております。「イエスは叫んでこう言われた。『わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである』。このようにおっしゃっています。49節でも「なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だからわたしの語ることは、父がわたしに命じられたままを語っているのである。」このようにイエス様はご自分の言葉が父なる神様の御言葉であること、また「わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである」と、このように御自身が神様と一体であられることを確言しておられます。

◆この主イエス様の自己主張は当時のユダヤ教徒たちには全くのつまりぎであります。このようなことを言った預言者はかつて一人もおりません。確かに預言者は神様から託された言葉を語りますから、それは神様の言葉であります。しかしそれを語る預言者は、「私は神と一体である」とは、誰一人言いません。このことはすでに読んだ所がありますが、10章30節で主イエス様はこう言っておられます。「わたしと父とは一つ

である」と。私たちの主イエス様とイエス様を遣わして下さった父なる神様とは一体であります。14章9節以下でもイエス様はこう言っておられます。「イエスは言われた。『フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、<わたしたちに御父をお示してください>と言うのか。わたしが父に内におり、父が私の内におられることを信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。わたしが父の内におり父がわたしの内におられるとわたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。』このようにイエス様はおっしゃっています。先ほど司会者の上田長老は、お祈りにおいて、このヨハネ伝の冒頭に触れられました。「初めに言があった。言は神と共にあった。その言が肉となって私たちの間に宿られた。」その御方が、主イエス・キリストであられる、というのが、ヨハネ福音書の序言の告知であります。

◆上で読みました14章13節以下にこうあります。「わたしの名によって願うことはなんでもかなえてあげよう。こうして父は子によって栄光をお受けになる。わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう」と主イエスは仰っていて下さいます。ですから私達キリスト者は、イエス様の名によってお祈りいたします。そしてその願いは、御独り子をさえ賜る御愛の故に、何でもかなえて下さるのです。これほどに有難い御約束があるでしょうか。

◆そして、14章12節において、主イエス様はこうも言われます。「はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる」と。私達は、この旧・新訳聖書を通して神様の御言葉、イエス様の御言葉を聞き、その御業に触れるわけでありますけれども、イエス様はこの14章12節で、「はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行いまた、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くためである」とおっしゃっています。これはどういうことを指すのでしょうか。今年5月15日の週報の「牧師の落穂拾い」にこのような文章を掲載しました。《人間がイエス・キリストの御言葉を自分たちに語られたものと認識し、その御業を自分たちのために為されたものと認識し、そのメッセージを自分たちの課題と認識し、さらに他の人々のために、自分たちなりに最善のことを希望する場合、それは人間の経験、行為として起こるであろうが、それは人間の能力、決意、努力によって起こるのではなく、ただ神の自由な恩寵においてのみ起こるのである。この神の自由な恩寵において、それら一切のことは人間に施与される。このような施与と賜物における神が、聖霊なる神である。》これはカール・バルトの「我は聖霊を信ず」ということについての説明です。これは実に見事な表現で、実に聖書的だと思います。これが先程のイエス様のお言葉の説明になっていると思

ます。「はっきり言うておくわたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、またもっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」最後の「わたしが父のもとへ行くからである」とは、イエス様が天に昇られることを指し、そこから私たちの許へ聖霊として降られる、所謂、聖霊降臨のことを指しています。そしてその父なる神の御霊、主イエス・キリストの御霊が最初の聖霊降臨節に弟子達の1人1人に留まったのです。その時彼らは語り出したのです。つまりわたしたちの信仰というのは、そのように今、聖霊なる神様としてわたしたちの内に生きて働いておられる御霊なる神様を、イエス様を、私達一人一人は信じているわけであります。

◆今日も一緒に礼拝を守っている丹波恵先生の愛唱聖句はガラテヤ書2章20節です。これはパウロの言葉であります。文語訳では、「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」となっております。これは、神様を信じ、イエス様を信じているわたしたち一人一人の愛唱聖句というよりも、わたしたちが今、イエス様を信じて生きるという事はどういうことかという、わたしの内に復活の主イエス様が生きて働き、語っておられるということをパウロは告白しているわけであります。イエス様は「わたしと父とは一つである」とおっしゃいました。ここでわたしたちはユダヤ教徒を越えて、クリスチャンとして、その御言葉を信じるわけです。けれどもイエス様は、正に聖霊において私の内に生きておられるのです。イエス様は「はっきり言うておくわたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、またもっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである」と言われます。わたしたちは、謙虚さに馴れていますから、なかなかこういうふうには言いません。けれども、ここにわたしたちの信仰の脆弱さがあるのでないでしょうか。本当にイエス様が、神様が、私の内に御霊として生きて働いておられるのでないならば、わたしたちは救われていると言えるでしょうか。このようにわたしたちは本当にイエス様が父なる神様と一つであられて、そのイエス様が私たちの内に、どのような時にも共におられて生きて働いておられ、わたしたちの祈りを、言葉にならないわたしたちの内にある思いを聞いてそれを叶えて下さる。そういう信仰の日々をわたしたちは生きて来たのでしょうか。生きているのでしょうか。

◆イエス様は、「私を信じる者は、私の行う業を行い、またもっと大きな業を行うようになる」と、おっしゃった通りに、御自身、聖霊として、信じる者一人一人の内に宿り、そして一つとなって生きて働かれて御業をなさいました。それが伝道ということでもあります。わたしたちはそのような伝道に生きるように主は語られておられるわけでもあります。そのような次第でありまして、わたしたちはイエス様を神様と一つの方として、神の独り子として、救い主と信じるという事は、とてつもない大きなことでもあります。この信仰の中に一切の善きことがあります。一切の祝福があります。ですから、イエス様は46節で、「わたしを信じる者が、だれも暗闇の中に留まることのないように」と、このように言うておられるわけであります。

◆「キリスト教にはどんな御利益があるのか」と問われることがあります。御利益の一切はイエス様を信じることです。これ以外にキリスト教の御利益はありません。一切は今、申してきましたように、イエス様を信じる事、これ以上の益はありません。12章50節でイエス様は「父の命令は永遠の命であることをわたしは知っている。だからわたしが語ることは父がわたしに命じられたままに語っているのである」と言われます。このようにイエス様を通して語られる神様の戒めは、そのどの一つも神様の究極の善意から発せられています。神様はわたしたちに求められることをまず、ご自身が実行されます。その上でそれを私たちに求められます。以前にも何度か触れましたが、ヨハネ伝15章12節にこうあります。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」このようにイエス様は繰り返し語っておられます。イエス様の御言葉とその御言葉と一つである御業は、「驚くべき愛」以外の何ものでもありません。この愛だけがわたしたちを裁くことができます。今日の箇所47節にこうあります。「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいてもわたしはその者を裁かない。わたしは世を裁くためではなく世を救うために来たからである。わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者にたいしては、裁くものがある。わたしの語った言葉が終わりの日にその者を裁く。」イエス様の御言葉、その御言葉と一つであるその御業、それはどこまでも真実です。仮にそれを受け入れない者があるとすれば、その言葉が終わりの日にその者を裁くとおっしゃっています。そのような事として、私達はイエス様を信じて来たでしょうか。信じてその戒めに聞き従ってきたでしょうか。そのことを私は終わりの日を待たないで、今、そのことを問われているのを強く覚えます。だれ一人例外なくイエス様の御言葉によって裁かれるのであります。いずれにいたしましても、神様の戒めは究極の善から発せられています。神様はわたしたちに求めることをまず御自身実行されます。その上でわたしたちにそれを求め給うのであります。もう一度私たちはイエス様の御言葉を100%まともに受け止め、信じて歩む時、その時イエス様がおっしゃったように「わたしを信じる者はわたしの業を行いもっと大きな業を行うようになる」という事が私達一人一人において実現して行くであります。

#### ◆ お祈りいたします

主イエス・キリストの父なる神様

わたしたちはこの聖書を通して、あなたが語り給う御言葉をお聞きしますけれども、聞き流してしまって、真にあなたを信じていないことをさらけ出しています。どうかこのような愚かな者を憐れみ、あなたの御愛の御力によって、あなたがわたしたちの中に住み給うことによって、わたしたち一人一人をあなたと一体なる者として下さい。そして、あなたの恵みの福音がわたしたちの接する一人一人の内に宿りますように。この祈り、主イエス・キリストの御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。